

# 記憶に残る2020年に未来へ繋げる記録を残す ～2020年夏、教員へのアンケートから～

Leaving Records for the Future in the Memorable 2020  
-From a Survey of Teachers in Summer 2020-

杉山 知之 SUGIYAMA Tomoyuki

デジタルハリウッド大学 学長  
Digital Hollywood University, President

2020年は記憶に残る年となった。指数級数のラインに乗って発展をしつづけるテクノロジーも、COVID-19によるパンデミックを止めることはできなかった。二人の人が寄り添う形が、「人」を表す文字となっているわけだが、人は人から離れるということでは感染拡大を抑え込めないということを知る。世界的なStay Homeの中で、インターネットが商用となり拡大を始めた1995年から、綺羅星のごとく現れる新たなテクノロジーに翻弄され、寝る間も削ってきた、この四半世紀の生活を省みる時間が持てたのだ。パンデミック前から眩かれてきたNew Normalというコンセプト。これまでとは異なる世界観を構築し、それが人々の日常になる世界。しかし、それが何かは誰も知らない。COVID-19後なのか、COVID-19と共になのか、いずれにしろ「新たな日常」を思考すべき時だ。本稿は、筆者のそんな思いから、本学の教員に、New Normalをキーワードにして、未来についてアンケートをとったことについて述べるものである。未来における重要な資料として、アンケートの回答の全文を文末に付録として掲載することとした。

キーワード：New Normal、未来、COVID-19、デジタルハリウッド

## 1. はじめに

2020年は全人類にとって記憶に残る年となるだろう。世界を濃密に結ぶ交通機関網が、COVID-19を急速に世界に広げていきパンデミックとなった。人と人が接触すればおのずと感染が広がるということから、世界中でStay Homeが余儀なくされ、国境を越えての人々の移動がほとんど行われないう状況にまでなった。われわれ人類の活動が、人同士のコミュニケーションにより成り立っているということを誰でもが実感した。多くの人々が共通に何かを実感するという意味では、開催されるはずだったTOKYO 2020オリンピックを遥かに超える体験となってしまった。しかし、リアル空間を共有してのコミュニケーションを絶たれても、代替手段がすでにあったのが2020年の人類社会だった。もちろんそれは、インターネットを利用したデジタルコミュニケーションである。思い返せば、1989年から2019年の平成の30年間は、ICTが飛躍的に発展した時代だった。電話回線を利用したパソコン通信から、インターネットでの電子メール、ホームページ作成ブーム、検索サービス、音楽配信、スマートフォン、eコマース拡大、数億人から数十億人が利用する様々なSNSや動画配信、さらにブロックチェーン、仮想通貨、ディープラーニング、VR、AR、MRなどのXR分野が立ち上がってきた。経済的にも重厚長大企業がメインプレーヤーだった世界から、GAFAMに代表されるようなビッグテックが経済の牽引役に変わっている。デジタル技術の拡張という点からは、歴史に残るべき30年間だった。

そして日本は平成から令和となり、東京オリンピックを迎える2020年に、COVID-19によるパンデミックが世界を襲った。本学は、東京での感染の広がりを見ながら、2月に2019年度の卒業制作展を駿河台キャンパスで行い、3月に卒業生と教職員のみの卒業式を日経ホールにて行った。しかし、国内における急速な感染拡大に伴い、20年度の新学期からはすべての講座をオンラインで開講する措置をとることとなった。準備期間として2週間ほど新学期の始まりを遅らせて、新入生のためのアクティブラーニング、本来は北

海道での研修をオンラインでの新入生研修に切り替えて開始。大学はそのインフラを支えるためにサーバーの強化、新システムの運用、多人数に対応する60にもなるZOOMのライセンス、さらに学生同士や教員とのカジュアルなコミュニケーションを支えるSlackの導入を行う中、教員はGoogle Classroomなど、様々なツールを試しながらオンラインでの講義を進め、それぞれの教員の知見を共有すべく、オンライン授業についての教員研修を、授業開始前の4月10日からすでに4回行った。1Qは、それぞれの教員が手探りの部分もあったが、学生からのフィードバック内容も概ね満足という結果が得られた。またデジタルハリウッドとして、2005年よりWEBデザインやCGアニメーション制作などのオンラインスクールを運営してきたことから、コンピュータを用いる実習においても、すぐにオンライン化に対応することができた。2Qにおいては、かなり落ち着いて大学のカリキュラム全体が運営されていったが、オンラインでの長所短所も見えてきた。遅い夏季休暇となり、教員たちも、今回のCOVID-19によるパンデミック収束後の世界について話題が出るようになった。

ある意味メモリアルとなった2020年、「New Normal」というお題に、本学の教員たちが、この瞬間どのような答えを持つのか、それを集めて記録することも重要だろうと考え、本学の紀要『DHU JOURNAL』の記事としてもらうことにした。筆者より教員に宛てた依頼メールの内容は次の通りである。

「ここ数年、コンピュータとインターネット関連の弛みない技術革新が、ビッグデータ、人工知能、ブロックチェーン、5Gなど、様々な形で実用化され、一般にも変化が具体的に感じられるようになってきました。その一方、地球温暖化、貧富の差の拡大など、全世界規模の問題も広く認識されるようになりました。知識人に限らず多くの人々が抜本的改革を考えるようになり、New Normalという言葉が立ち上がってきました。2020年度、日本においてはTOKYO 2020オリンピックを行い、これからの未来への節目となるような1年となるはずでした。しかしCOVID-19の世界的なパンデミック

により、多くの国で人々はStay Homeを余儀なく続けることとなりました。このことがこれまでの生活を見直すきっかけとなりました。

未来を創る若者たちと共にあるデジタルハリウッド大学の教員は、どのようなNew Normalを想起されるのでしょうか？

教員のみならずには、2020年を変革へのチャンスと捉え、どんなことを、これからの社会のノーマルとしたいか、それをご自身の専門も踏まえて、ひとつだけに絞って書いていただきたい。文字数は200文字から400文字ぐらいでいかがでしょうか？

結果、65の回答を得られた。自由に考えを述べてもらったが、結果を分析すると、ほぼ4つのトピックに分けられることとなった。社会、ビジネス、コンテンツ、教育の4つである。本来、分析が目的ではないが、それぞれについて、オンライン上の分析ツールで簡単に言葉の出現頻度を見た。

## 2. 結果分析

### 2.1 社会

New Normalという言葉に縛られずに発想された回答が多いと感じた。新たなNormalを定義するというのではなく、今回のパンデミックをひとつのチャンスとして、もう一度、根本的なところから人とは何かを問い、そして目指すべき社会とは何かを考え直すべきという方向性が感じられる。



図 1：社会のワードクラウド

### 2.2 ビジネス

ビジネスについては、そのスタイルが大きく変化するというのが共通している意見だと感じる。新たな技術を開発するまでもなく、すでにサービスが広く行われているものを利用するだけで、ホワイトカラーの仕事のほとんどがリモートワークで行えることが明らかになってしまった。本社そのものを地方に動かすことを決定した大企業も現れている。副業を許す社会状況も含め、ここから21世紀らしいビジネスマンが出現していくのだろう。



図 2：ビジネスのワードクラウド

### 2.3 コンテンツ

すでに、コンテンツ制作現場がデジタル化されているが、それがさらに広がるだろうという認識は一致している。コンテンツを視聴者に届ける方法も、テレビジョンや映画館などではない方法がデジタル技術により模索されてきたが、それが今回のパンデミックで大きく加速することになるのだろう。



図 3：コンテンツのワードクラウド

### 2.4 教育

本格的なオンラインでの教育実践を経験することにより、これまでの教育システムが大きく変わる、または変えていかなくてはならないという気持ちを感じる。しかし、実践することにより、現状のオンライン環境への問題点も見えてきており改良も望まれている。また対面で行う教育でしかできない部分も見えてきた。学校という実空間では、対面でプロジェクト型の実習を行うことが多くなるのだろう。



図 4：教育のワードクラウド

## 3. おわりに

デジタルハリウッドは、筆者が1987年から3年弱在籍したMIT Media Labの二人のファウンダーの考えからインスパイアされ、そのことを基盤として1994年に設立されている。メディアラボを作ろうとしたニコラス・ネグロポンテ教授は、「コンピュータ＝メディア」という見方を世界に与えた。メディアラボ創設に尽力したもうひとりのファウンダーである元MIT総長のジェローム・ウィズナー教授は、「21世紀の最大の問題はコミュニケーションとなる」と予測した。そして、2004年の専門職大学院設立から四年制大学設立に至り、メディアラボにおいて、筆者と同じ「音楽と認識」という研究グループにいらした人工知能の父のひとりと言われるマービン・ミンスキー教授の言葉が、大学の理念となった。教授はあるとき、「AIとロボットが発達した世界で、人がやることは生まれてから死ぬまでエンタテインメント以外に無いだろう」と筆者にラボの廊下で辻説法をしてくれた。今回のパンデミックは、コロナ禍といわれるように、まさに「わざわい」であつたわけだが、その中から福を見つけるとすれば、それはすでに、すべての人が十二分に使えるデジタルコミュニケーション環境が身近に揃っていることを、人々が知ったということではないだろうか。EdTechも

教育のメインストリームとして扱われるようになるだろう。XRのテクノロジーも教育の中で使われるだろう。デジタルコミュニケーションを使いこなすレベルは、とくに教育において急激にアップするであろう。現文部科学省萩生田光一大臣は、オンラインとリアルハイブリッド教育体制を大学で行うように促している。デジタルコミュニケーション学部である我々は、さらに一歩先の大学を具現化することが使命といえるだろう。教員それぞれの思いを現実化すべく、デジタルハリウッド大学らしい大学運営を行っていきたい。2020年のひとつの記録として、この記事が残ることが未来において意味があるものとしたい。

## 謝辞

アンケートに回答して下さった諸先生方に心から感謝いたします。

## 付録

トピックごとに、姓の五十音順で掲載する。なお、原則原文のままとしているが、文意を損なわない範囲で筆者が修正を加えているものもある。

## 【社会】

今年の日本はオリンピックをはじめとした数々のイベントで躍動の年になるはずだった。しかしコロナ禍は日本だけでなく世界の夢を打ち砕いた。

現在日本の多くの会社、学校で在宅勤務、web会議、web授業が急速に取り入れられている。しかしこれらは本学では従来から実施してきたことであり、これらが一般化したのはコロナ禍が直接の原因とはいえ、世の中がようやく本学をはじめとするデジタル化の波に追いつき始めたということができるであろう。

私の担当する法律の分野でも新しい動きが出てきている。第一は契約書のサインの電子化である。従来契約書に電子署名を行うためには署名する本人があらかじめ電子認証を受けていなければならないとされており、手続きが面倒なため普及が遅れていた。今年これが大きく緩和され、本人でなく電子的な契約のサービスを提供する会社が認証を受けているのですむとされた。これにより契約書の電子化は大きく進むと思われる。

第二は株主総会のバーチャル化である。従来も株主総会の開催は本会場における株主の出席以外に、株主が会社と双方向の意思表示ができる場合はオンラインによる出席も認めてよいとされていた。これを政府は「バーチャル総会」と呼ぶが、オンラインの出席をいまだに「バーチャル」と呼ぶところに無力感を感じるのには私だけではあるまい。とはいえ、政府は「本会場」なしのオンラインのみの株主総会も検討の視野に入れており、今後「バーチャル総会」の採用は急速に進むと思われる。

コロナ禍の早急な終息を祈るとともに、どの分野の研究や学習をする場合も、常に新しい動きに注意を払い、遅れないようにしなければならないと痛感している。(味村 隆司)

「生き残る種とは、最も強いものではない。最も知的なものでもない。それは、変化に最もよく適応したものである」

というのはチャールズ・ダーウィンの言葉です。

今年の春以降、オンラインで会議や交流する機会が増えたことで、何かを「伝える」という気持ちと、それを相手に届けるための身体表現や非言語コミュニケーションの重要性を強く感じています。

ダーウィンの言葉通り、変化に適応し……というより身を任せて、これまで以上に自分と世界とのかわり方に目を向けて、創造力を注いでいこうと考えています。(荒木 シゲル)

これからは「いつも通りに考え、行動する」ことがこれまで以上に大切になると考えます。

コロナ禍は社会に大きな変化を生み出しています。しかし変化の構造自体はそれほど複雑なものではありません。少なくとも日本の状況をみれば、混乱の多くはただの「お粗末さ」に起因しているからです。その一方で、何かにつけ一喜一憂し、付和雷同する人も多いようにも感じられます。その要因の一つは、歴史や文化、社会構造や技術といった、いまの社会を成り立たせる過去からのさまざまな積み重ねに無自覚であることです。

その結果、「変革」に対して不必要に身構えてしまい、これまでの土台の上で当たり前のことを考え、行動することが難しくなっているのではないかと思います。

いつも通りに考え、行動する。そして気がついたら、そこに大きな変革が生まれていた。そういう状況がこれからの社会のノーマルになればいいなと思っています。(市瀬 博基)

自然の恵みから採ったモノで生きていた人間は感謝の気持ちを忘れていなかったし、狩猟時代でも人間は自然の怖さや恐ろしさを神に託して生きていた。しかし、物々交換までは必要性が価値だったが貨幣の登場で人間性より世間の判断が優先になった。作るだけでなく比較することで価値が生まれて、需要が供給より多い場合、価値はさらに高く評価される時代になった。コロナ時代、対面の価値は益々その存在の意味さえ薄くなり、サービスの形も急変している。非常識が常識になり、アブノーマルがノーマルになる2020年は、世界中の人々を同じスタートラインに立たせた。何が起きるか、何処へ行くのか、何が待っているのか全く分からない転換期を迎えて、ニューノーマルはある意味で人間そのモノを見直す機会から得られるのではないかと。遠隔、非対面、オンラインなどまるで人より文明の機械が支配する時代の到来を感じる自分。気のせいだけではこの時代の変化に危機を感じるのだ。手作り、おもてなし、ぬくもりなど人と人の交感で交歓できるニューノーマルのコミュニティを先に考えて、準備するべきではないか。(李 泰文)

いまこそ、愛することを考えるとき。

「愛」というのは、恋愛とか友愛、慈愛という意味の他に、「距離」を意識しなかったお互いの関係。近さ。お互いを思いやっていた関係のことである。ほんとうに大切なもの、それは「愛」だと思う。

ジョルジオ・アルマーニが「業界の現状をリセットしてスローダウンする貴重な機会」と言っているように、いまこそ社会や産業について考え直すときなのかもしれない。コミュニケーションやメディアも例外ではない。必要なのは、お互いを思いやる「愛」である。(伊藤 孝一)

私は、科学的データや人工知能が予見する未来をもとに、人間をより幸せな方向に導いていく技術を実現したいと考えています。将棋や囲碁、様々なゲームでは、人間を超える人工知能が生まれています。これらの人工知能は、人間の価値観を良い意味で壊してくれています。藤井聡太君は、コンピュータ将棋で勉強していると言われています。一昔前は、プロ棋士が集まって研究会という形で将棋の最新形の勉強会を行っていましたが、今や人工知能が先生となって、これまで人間が陥っていた常識を破る手がどんどん生まれているのです。

人間は様々な人間固有のバイアスを持っていて、固定概念に縛られがちですが、人工知能にはそれがありません。このバイアスを良い意味で打ち破ることで、より良い未来が見えてくると私は信じています。人工知能と我々が自然と調和して、より良い社会や生活を営む未来を創造する研究を行っていきたくて考えています。(伊藤 毅志)

四半世紀後の2045年には、2020年は新しい価値観と文化のエポックを画す年だったと評価されると予想しています。突然に人類を襲ったコロナ禍で、人々はそれぞれの役割を探求し、お互い協力して対処しました。これまでの多発した震災とは異なり、世界規模で一丸

となって、人類は今の難局を切り抜けようとしています。過去のしがらみに囚われている場合ではなく、共同参画で取り組まないと生き残れないと感じているのかもしれませんが。コロナ禍の終息はまだ見えませんが、この人々の対応は、確実に新たな価値観への移行につながっていくでしょう。他者と歩み寄り、共同で作業することとそれに伴うコミュニケーションが、新たなノーマルとなりえます。革新的な技術を手にしても、価値観が進化しなければ使い物になりません。これからの四半世紀こそ、デジハリが培ってきた先端技術が大いに活躍する時代になるはずだと心躍ります。(梅本 克)

ニューノーマルというよりは、ノーマルがないことがニューノーマルになると考えています。

社会全体で考えると、人種差別問題や、環境問題、LGBTやら、大企業のイノベーションのジレンマばかり、今までの常識も全て、毎秒変わっていくんだよ、というのが当たり前で、決めつけずに柔軟に対応しようね、失敗してもいいよねっていう考え。ノーマルがない、ノーマルを決めつけない状態。

コミュニケーションにまつわる文化やテクノロジーは飛躍的に進化したが、結局人は人のためになることを「生きがい」と思う、シンプルな動機は残る。

今後、若年層同士から生まれるビジネスモデルやアイデアの方が、社会を救うという場面が増えていくような気がしますが、アントレプレナーシップの教育が不十分なこともあり、いろんなことがスピードを伴って回らないような気がしています。

ニューノーマルは、自戒も含め、ノーマルを捨ててノーマルを持たないことで、創造力の可動域を広げて、これからも突発的に起こりうるであろう問題に対しての、瞬発力や解決力に大きく影響すると思っています。(Olga)

リモートワーク実施により、自身を内観する機会を得た方々が多いと聞き、コロナがもたらしてくれた良い影響の一つと感じています。メンタルコーチとして多くの方々と接する中で、「物質的に成功しても幸福になれるとは限らない」事実気づかぬまま人生を過ごし、自身の考える「成功」を達成した時に「何か違う」と感じがつかりする人が多い事に気付きます。また、他人と自分の「持っているモノ」を比べ、人生を嘆きながら過ごす人が多い事もまた事実です。しかし、お金も地位も名誉も理想の恋人も全て、幸せになる為の手段でしかないという構造と、幸せは探すものでも手に入れようとする力むものでなく、感じるもの、気づくものだという事が最近の多くの研究で分かってきました。その流れが大きくなり、自分を受容する人、幸せを感じる人が増え、世界平和に近づいていけば嬉しいですし、その為に私ができる最大限の事をやっていきたいと考えています。(亀田 卓)

“New Normal” から想起するものは何か？ Newと断りがつく限り、それはまだ何か「特別」な居心地の悪さが残っている。しかし、急速に世界は変容し、人々はリアルとバーチャルを再統合してゆくだろう。いま、新型コロナウイルスの感染拡大が続く中、私たちは対面であることの必然と対面ゆえに居心地悪いもの、不要なものを峻別する機会を問わずも与えられている。私は“New Normal” な社会では、人々がもつとわがままにストレスフリーな社会を志向できるようになることを願う。それは、「好きなこと」「好きでないこと」、「得意なこと」「得意でないこと」を仕事や生活で峻別し、よりわがままを貫ける社会のことである。日本はこれまで余りに従前の規範やルール、固定観念に囚われていた。今こそ、こうした呪縛から解き放たれ、もつと柔軟にもつと自由にチャレンジできる社会となって欲しいと切に願うばかりである。(鴨志田 晃)

旧来の価値観では負の方向に捉えられがちだった消極的なこと、受動的なこと、追従することなどがもつと肯定的にデザインされるよ

うになっていくのではないか。このために何かをしないこと、表現しないこと、創造しないこと、決定しないことなどに新しい価値がたぶんでくる。これらの流れを自然とすることに重点を置いたある部分を担ったり、たまに何かしたり、省略のために工夫する新しい仕掛けや仕組みをつくることや、これまでの仕掛けや仕組みを更新することが必要となってくる。そこでは自由が尊ばれ、暴力がなく、内発的に最善が追求され、たまに祝祭的である。論理的に確からしい共通の言語能力と、科学的で歴史的な教養をもって全体の現象を感じる力を育成する役割を主に担い、変化のための加速度を生み出し続けることが私たち前線で求められていると思う。(木原 民雄)

「ソーシャルディスタンス」をポジティブなメタファーとして考えてみませんか。

集団指向、空気を読むことを強要する空気、浮くことをひどく怖れる若者。そんな日本社会の今までの「ノーマル」ではなく、人と人との間には必ず差異＝距離が存在し、だからこそ共感や社会性、人間としての共通性が大切なのだと認めることで、個性や差異を自然なものとして受け入れ、自由な意見が言える社会が可能になります。新しいノーマルは人と人との間に存在するディスタンスの認知と、それを受け入れた上でつながりを指向するコミュニケーションから始まります。

日常の中でのちょっとした気づきや違和感を深掘りすることでメディアアーティストたちは既存の「ノーマル」の呪縛を脱し、世界の新しい可能性を提示します。自分と周囲の間に存在する距離を認識することで誰もが自分のオリジナリティを発掘できる、そんな New Normal を期待しています。(草原 真知子)

国境、人種、政治と全てを超え、人と人を繋げる役割をするのが我々クリエイターの仕事です。社会が閉鎖された今この瞬間こそ、自身の内面をアウトプットし様々なメッセージを世界中の人たちに伝えられるチャンスと考え、恐れずにチャレンジしてください。作品の向こう側には必ず見てくれる人たちが待っています。世界がどのように変化変容しても私たちがやる事は変わりません『伝え続ける』。(桑原 智)

どこに思考のフォーカスを当てるのか？

思考が「私」以前の変化、出来事、関係性であるとすれば自ずと、ヒト+A I+A I (Alien Intelligence) のアレンジメントの中を、「人」は不思議な抽象機械に生成していくのでしょうか。新しい形の自給自足、ベーシックインカム、動物化・・・more, more・・・think more! (斎藤 光弘)

世界は「絆主義社会」に移行していくと考えます。

絆主義社会とは…その人と一緒にやりたいとか、そのビジョンに共感したということの価値が、どれだけ多く儲かるかといった「目の前のお金の価値」に左右されずに生かされて、物々交換、作業交換、応援しあうといった「心心交換」によって新しいプロジェクトがスタートしやすくなり、日常も社会も共感を生みだしながら互いに良くなっていくという社会。逆説的に日々の生活に必要な少額のお金はたいへん貴重になるイメージがあります。

先が見えない時代・人と会えない時代は、一人ひとりが自分から魅力的なビジョンや仮説を発信し、共感者のネットワークをつくって新しいコトをプロデュースしていくことが増加。それが、自分の明日の暮らしの一場面を変える小さなことでも、社会を変えるような大きなことでも。

こういう行為をサポートするインフラは充実し、「どんなコンテンツを生みだして人と社会に貢献し、自分自身が表現者としても楽しめるか」を大事にする時代になるだろうと考えます。(佐々木 直彦)

有事における対処方法は、技術の発展やノウハウの蓄積により進化し続けている。

しかし、社会の変化と共に対処すべき問題も変容し、まだ浮き彫りになっていない問題もあるだろう。平時の備えという、苦難に直面するまでは軽んじられる事もある。

しかし、サバイバルをテーマにした作品やアウトドアを好む人は多い。また、社会のシステムを十分に享受できない状況においては、自身で考え、行動し、造り出す力が試されるであろう。

モノ作りやアートを探求する我々が先頭に立ち、2020年代的な技術や価値観、思想でサバイバル技術をアップデートし、また、サバイバル的視点で2020年代に起こる現象を捉え、全ての生活者を巻き込んで語る場が必要だ。サバイバルという領域で、ジャンルを超えた人々の交わりが、人類の未来を繋ぐ発明を生むはずだ。(鈴木 由信)

パンデミック、地球温暖化による気象変動など、これまで「発展」につながると考えられていた行動が人類に未曾有の危機を招来している。必然として生起する問題を予見せずに事後処理に奔走するありようは、更なる困難を涵養するカオスにも映る。ゲノム解析や情報処理技術が飛躍的に発展している現在、「戦略的情報の可視化」と「事実に基づく正しい行動」が社会的規範とされるべきであろう。感染対応病床の確保という政策的要請が、医療現場におけるベッドコントロール、ヒューマンリソース・マネジメント、救急医療体制等にどれだけの負担をかけるか精緻に予測し、認識したうえでなされていけば、医療者たちの疲弊は軽減できていたはずである。教育システム、医療提供体制、災害対応など、いずれもコミュニティが基盤であり、旧来の「復旧」の発想では未来は拓けない。(関口 潔)

ところで「神の死」と「人間の死」の後で「自由・平等・友愛」はなお有効でしょうか？ 社会の水平化と多様化は本当に表裏一体ですか？ 彼女はなに抗っているのですか？ 彼は何と戦っているのですか？ 変化だけが確実な世界でボートは漂流しますか？ 少しだけ楽観的に明るい未来に向かって行ってもいいですか？ 連帯の想像力と瞬発力を鍛えよう。あなたの目の前には今日も青空が広がっていますか？ (じつはよくわからないのでだれかえらいひとおしえてください(笑)) (土田 武宏)

フィジカルとヴァーチャルが融合した新しいライフスタイル。(中橋 敦)

2020年あり得ない事態が有無を言わず覆い被さってきました。これは神の仕業なのか、と思わせるようなこれからの時代に対する試練だと思います。この機会をチャンスとして変革のチャンスと思うことに、ある意味喜びさえ感じます。

家の外に喜びがある、という概念はすでに時代遅れのような気がします。家の中の宇宙で過ごす。それを支えるのがデジタルです。家族のイベント、人との付き合い、娯楽やゲーム、あらゆるものが、外に出なくて大きな喜びを与えてくれるものになってきました。「GO TO MY HOUSE!」を改めて教えてもらいました。

これからの社会のノーマルにこの言葉を推したいと思います。(南雲 治嘉)

SDGsをベースにしている。

世界の狭さを感じている。

自由度が格段に上がることを武器にできている。

複数の仕事をしているのが当たり前。

文化の異なる多様なコミュニティで創造性が加速する実感とやりがいが増す。

New Normalでも変わらない本質を大切にしている人こそ魅力的だ。

世界的な危機が訪れても抜け出す生き方を見出せる。

見知らぬ人に今よりも優しく、想像力を持って関心を寄せ発信し合うのが普通。

規模ではなく個人の出カインパクトが存在感を増す。

速さと緩さのgapの大きさを自身で選択し楽しめる。

生活と世界を一緒に考える人が活躍する社会。

自分のLifeを自分で決める人が伸びる機会を持つ社会。

20-30代が抜き出るチャンスが広がる社会。

みんな違っていいんだよが加速する社会。

受け身な人が本当の楽しさを分かんずに時間と情報に流される社会にさらになるのかも。。。(成田 修久)

常識では考えられなかったライフスタイルが必要なアフターコロナ。コロナをも受け入れなければならないと考えるのか、コロナを受け入れるのか、否定することよりもそれ許容することを選んだ社会の中で、「イノベーションは常識からの逸脱行為から生まれる」と言う事を知っているアーティスト達はストレスも無く、慌てることも無く、新しい生活をはじめている。

コロナ渦で無くて自己管理は当然で、自然の空気感や感情を感じ取る事と同じだ。New Normalを生きる若い人達に考えて欲しいのは自意識を持って生きる事。実際に対面することは難しいが、向き合えないと言う事は年齢、人種、性別、など全ての垣根を取り壊す良いチャンスだ。社会は自らが作りあげると言う心を持ち、それぞれの物差しを持ち、想像力から創造力を高める力を養って欲しい。まだ誰にも見えてはいない新しい力は目の前にある。創造するための時間には限りは無い。(HAL\_)

互いの肌を寄せ合うことで歓喜を共有し、悲しみを分かち、恐怖を克服してきた人類が、それらに代わる身体表現、コミュニケーション手段を模索しなくなってきたのだと思います。クローズなコミュニケーションはどのように担保し得るのかその未来を考える、これほどの良い機会はおそらく人類史上二度とない、そんな絶好の時期なんだと考えています。(福岡 俊弘)

君のノーマルと僕のノーマルは同じでないし、昨日の僕のノーマルは僕の今日のノーマルとも違って。これが当たり前だという君のノーマルは、当然誰かを殺す可能性があるし、明日の僕のノーマルが君を殺すこともあるだろう。昨日と違う自分をもっとカッコいいオレを日々自分勝手に目指せないなら誰かのカッコよさに痺れていればいい。カッコいいはずのオレは9割方カッコ悪いが、生きているんだからカッコ悪いまま1割に賭けるんだ。ニューとかノーマルとか言ってるのってカッコ悪いだろ？ 今のオレが最高に決まってるんだ。(藤井 直敬)

言語以外にも場の空気や相手の全身から感情などの情報を得やすい対面のコミュニケーションが減少し、モニター越しの上半身から発せられる言葉や文字・絵などによるコミュニケーションが増加していく。一方で非言語情報を含むアートや音楽等は新たなメディアを媒体に進化する。そんなコロナ禍以前にも見られたコミュニケーションの一層の変化を背景に、未来のために社会と人間の価値を問いながら独自の道を歩むことが、日本のNew Normalとなることを願います。(藤巻 英司)

遠隔ミーティング、遠隔飲み、そしてオンライン学会、この3つを社会のノーマルとできればと思います。遠隔飲みについては、飲食業に影響が出ない範囲で、良い仕組みを考えられればと思います。たとえば、飲食店に遠隔用のスクリーンがあって、遠い場所でも二か所集まれるなど、です。(三宅 陽一郎)

戦後復興してきた日本がそろそろ次の時代へと舵を切る必要があるタイミングとしてコロナ禍を捉えると、今が変革の大きなチャンスと

言える。中央集権的な政府主導のほころびがもろもろのことに露呈している昨今、これからの社会のノーマルのペースは「分散による未来最適」だ。SNS社会に突入した21世紀は、勿論負の弊害もあるが繋がることによる中央集権からの脱却をあらゆるフェーズで促す。その最も重要な指針は明るい未来をイメージする事。それを信じ、繋がり、行動する。それがコロナ禍後に求められる同時代人の指針でありたい。日本人はまじめだから良い反面もあれば、それが窮屈さや弊害を生むことも多い。SNS時代の繋がり力で、そんな硬直を打破していかねばならない。それを進めるのが未来へのビジョンだ。今こそ、分散による未来最適で明るいビジョンを示そう！（吉田 就彦）

そもそもノーマルという言葉自体に強い違和感を覚える。普通を一方に置いたら、他方に置かれるのは異常だろうか。特殊、あるいは特異。普通という言葉には、常にそれが阻害する少数者が指差される。普通という言葉が消えることこそ、次の時代に起こってほしいことだ。その地平の先に真っ先に実現すべきこととして、デジタル空間を起点とする匿名性を背景とした差別的言論を受け入れない状況づくりを挙げたい。デジタル空間が誕生したとき、多くの進歩的な人々は自由で公平な空間であることを期待し、努力した。それから30年ほどたち、デジタル空間は日常的に差別やヘイト、無理解が横行する場になってしまった。コロナ危機がこの状況を加速している姿もしばしば見られる。デジタル空間が人間の醜悪な部分を増殖する場になることに、強く抗議し、抵抗したいと思う。（渡辺 パコ）

## 【ビジネス】

スタートアップの戦略構築や資金調達支援を仕事としている立場から見たNew Normalは、今、明らかに起業や副業・複業が身近なレベルで浸透しつつあることだ。元々、働き方改革・オンライン会議システム等のITの進化・VC資金の増加等があったが、これらがリモートワークという社会実験を経て有機的に結びついている。最大の変化は企業側も社員側も会社・仕事・暮らし等について根本から考え直すようになったことだ。私自身、自分の会社でコンサルティングを営みながら、SNS経由等で社外のプロ人材と連絡してプロジェクトを組み立てたり、逆に他社から大企業向けの案件の共同遂行を依頼されるケースが増加している。今や真面目な起業相談や資金相談がツイッター経由でも当たり前飛び交い、一回もリアル面談を経ずに投資実行するVCもある。そうした道具立てと人々の意識変化が、今後ますます起業や副業・複業のハードルを低下させ、若者から中高年に至るまで自立を促す起爆剤となるだろう。（伊藤 信雄）

都市部では対面でのコミュニケーションによらずともZOOM等の活用によりビデオ通話でのコミュニケーションが一般化しており、これが全国的な広がりをもたらす可能性がある。初対面でもビデオ通話で名刺交換することが一般的になり、これが進展すると対面以上のコミュニケーション力が問われることになり、対面に依らずともビデオ通話で伝える力、言葉の力が求められる。一方で移動時間が不要になることでいつでもどこでも双方向コミュニケーションが取れることになり、DXとの組み合わせにより生産性の向上が期待される。さらにテレワークやリゾケーションによりオフィスへの出社という働き方が抜本的に変わる可能性があり、首都圏では鉄道の利用率や不動産の価値や利用形態も変わる可能性がある。（伊藤 雅之）

私は大学で起業家とプロマネの育成を行う傍ら、内閣府主導の高知IOPプロジェクトの統括スーパーバイザーを担当し、県課題である①人口の減少、②高齢化、③担い手減少課題に対し、私が提案した④県内データの一元化、⑤AI活用自動制御推進、⑥遠隔ロボットによる作業負荷軽減施策が採択され、現在推進中です。特に⑥はコロナ

の影響で海外技能実習生の渡航が閉ざされ、収穫作業不足に悩まされています。これまで国や自治体は、実習生を受け入れる生活管理の運営面でも大きなコストを負担していたことから、この機会に大きな見直しを迫られており、その対策として遠隔ロボットによる海外や国内の遠隔地域からの制御作業が出来れば、コストを削減出来るだけではなく時代にマッチしたNew Normalになると確信しています。賃金の安い海外労働力を活用出来るメリットに加え、国内で自宅作業をしたい高齢者や身体障害者、子育て世代の雇用に収入のチャンスを与える場にも繋がります。最後にエンタテインメント性も重視し、遠隔作業をe-Sportsに発展させ、時間内の収穫量を競う名物イベントを通し、新たな市場を切り開く事でデジタルハリウッド大学の一人としてNew Normalの手本を示す先駆者でありたいと思います。（太場 次一）

環境が変わる中で、生活様式や働き方も大きく変わりました。私も外に出るのは週に1回で、今年の大学院の講義も全てオンラインで行うことになりました。

ぜひ皆さんには、今まで以上に「どこで働くか」ではなく「どういった仕事をしたいか」を在学中に考えてみてください。最後に頼りになるのは会社の名前ではなく、皆さんが「好きで得意」な事を持っている事です。

もし1つアドバイスがあるとすれば、副業OKな所を選ぶとよいでしょう。働いている会社で学べる事、それ以外のお仕事や取り組みで学べることは違います。（小川 卓）

企業中心から個人中心の働き方へ。

みんなが同じオフィスに出社して同じ勤務時間帯で仕事をする働き方ではなく、リモートワークでいつでもどこでも働けるように。

働いた時間で給料をもらうのではなく、結果に対して報酬をもらう。そうすると、特定の企業に属する必要がなくなり、自分のやりたい仕事をやりたいように働くことができる。

企業が担っていたバックオフィスや管理業務は自動化され、個人が場所も時間も内容も休みも自由に決められるような働き方がノーマルとなるように。（杉本 展将）

私の専門分野は、人の潜在意識能力開発です。人の内的なプログラミングがどのように創られ、無意識のストーリー（脚本）が人生にどのように影響を与えるかを具体的に伝えています。

意識・無意識の構造は、人間が持つ機能でありながら一般的に理解活用されていません。また人生に即効的に変化を起こす他者変革技術においては、卓越したセラピストやコーチなど一部の専門家のみが使える技術でもあります。

このような専門技術を誰もが使えるようなデジタルトランスフォーメーションが起こることで、能力開発の可能性は格段に向上します。潜在意識や心・思考という目に見えない世界はアプローチが難しく捉えられがちですが、人間の誰もが持つシステムとして理解し習熟することで、人生を豊かにする実践的な方法として活用することができます。

そのようなことが当たり前になり、自分らしく輝く人が増える新しい社会を目指しております。（田中 千尋）

リモートワークやオンライン研修、非対面営業など、コロナ禍において新しいコミュニケーションの行動様式が生まれている。コスト削減効果は言うまでもなく、オンラインを通じてリーチできる人や機会の数にも物理的な制限がなくなる。私たちはそのチャンスを真摯にとらえ、仕事や生活の向上に資する活動に繋げていきたい。

それと同時に、実体験の良さも忘れてはならない。息をのむような秘境の絶景に降り立ち、五感を研ぎ澄ませて場のエネルギーを体感する。人と人が出逢い、言語・非言語を通じて絶妙なニュアンス

を理解し、心の琴線に触れるような交流が起きる。  
今後、デジタルの力によってコミュニケーションの可能性が拡大するなかでも、この「味わい深い感覚」こそが人生の醍醐味といえる。「デジタルの力で人生の感覚を豊かにするコミュニケーションの在り方」これを、これからの社会のノーマルとして考察していきたい。(二階堂忠春)

オンラインで会議をすることが当たり前になりました。移動時間と交通費がなくなり、会議室の予約も不要になり、世界中から気軽に参加者を呼ぶことができます。会議中の資料のフレキシブルな共有やリアルタイムの投票、ブレイクアウトセッションなどバーチャルならではの便利な機能もあります。働き方の幅も広がる。もちろんリアル会議ならではの良さもあります。対面でこそ生まれる創造性もあります。だからポストコロナ後の世界はミーティングのハイブリッド化がニューノーマルであってほしい。必要に応じてリアル/バーチャル参加を選ぶことができる。そしてコラボレーションツールを積極的に活用することで時間と空間の壁を越え、私たちの生産性を高めていく。コロナによって一時的に経済的ダメージを受ける面はありますが、日本のイノベーションの加速、グローバル化をすすめるきっかけになってほしい。人と会うこと(Meeting)の革新が核心だと思います。(橋本 大也)

この数か月、時間や空間など様々な制約から解放され、「今を生きる」とは、働くとは何かを改めて考えることが増えました。テクノロジーの進化も相まって1つの職業や役割にとらわれず複数の活動など、新たなことに挑戦したり、家族や自分の肉体と向きあうことが多くあったのではないのでしょうか。これからの社会では今まで以上に様々な顔を持ち、意思決定の数が増えていくことでしょう。意思決定の数は人間の生き方を表す一つの指標になると考えています。テクノロジーの進化により多くの意思決定を行いやすくなった一方、人対人をメディアにしたコミュニケーションをとることが貴重になってしまった新しい生活様式においては、テクノロジーによって人との接し方や感性も大きく変わることも改めて強く意識することが重要になるでしょう。そう、止まっているエスカレーターを歩くような、あのテクノロジーによって生み出された肉体で感じる気持ち悪さのように。(三浦 亜美)

コロナ禍において、急速に世界ではデジタル化が進んでいます。マイクロソフトのCEOの言葉を借りれば、2年で起こる事がわずか2ヶ月で起きた、とコロナ禍で実際に起こったデジタル化を表現しています。今後日本でも加速するであろう、社会のデジタルシフトは勿論、企業が経営戦略をデジタルシフトしていく時代において、1社でも多くの企業のデジタルシフトをサポートしていきたいと考えています。(吉田 康祐)

## 【コンテンツ】

「音楽」のほとんどは、すでにデータ化され、「コンテンツ」として扱われている。また、「映画」は誕生以来、データ自体が作品になっている。現在、私たちが標準的に所有しているデバイスを使えば、鑑賞の場所さえ選ばない。その点では社会が定義しているNew Normalへの対応がすでに完了しているとも言える。ただ、1回だけアナログ的な作業がある。それは制作時の「録音」や「撮影」。  
しかし、これもデジタル化の進歩によって、「音楽」では圧倒的なリアルサウンドを構築できるサンプリング音源の使用や、「映画」では3DCGの使用によって、アナログ式制作に取って代わることも可能だ。コンテンツがすでに、リアルかヴァーチャルか見分けのつかない段階に達している。  
しかし、人間のインフルエンス傾向(例：絵<写真<動画<実物)をみると、「リアル」は圧倒的に人を刺激する。したがって、2020年

代になっても、「コンサート」という形式はなくなり、舞台上での「演劇」もなくなる。そこにはやはり人を感動させるリアルの大きな「力」が存在している。

歴史的にみても、疫病は約100年周期で人類を襲っている。だから、「音楽」はすでに何度もこうした疫病を経験してきている。流行が収まればsocial distanceも標準的な様式、配置に戻っている。そこには、リアルを求める人間の本能とも言うべきものがあるからなのか。一方、Googleをつけて、立体映像・立体音響を流せば、その没入感は半端ない。コンテンツをデータ化したことで、どのような処理や再現性も可能にしている。割合こそさまざまだけれど、「音楽」や「映画」は、リアルとヴァーチャルのバランスをとりながら、その両輪で進化している。音楽や映像は、すでに一歩先を行っている。さらに、次なる画期的なデバイス分野の登場によって、音楽・映像コンテンツは、いち早く進化し、次世代型NormalのInnovatorとなるはずである。(愛澤 伯友)

エンタテインメントコンテンツは享受する側からクリエイター側に変わる人が増えると思います。そのために制作能力を鍛えることも本学等で学ぶことを希望する学生が増えると思いますが、そういう学生に作るだけでなく、発信すること、人に見てもらふことの大事さ、そしてその方法を教えることが大事になってくると思います。機材やソフトの進歩で制作に対するハードルが低くなることで、多くの人がコンテンツを作るようになりますが、それが溢れ人に伝わらなくなってくると思います。そういうところでどう目立たせるかが今後の社会で意識されることになると思うので、私の授業ではそういう部分を伸ばせるような教育をしてその知見を持った卒業生が社会のノーマルとなれる位置づけになればよいと思います。(秋原 北胤)

私が担当している映像制作の授業に関して言えば、実際の撮影や演出の実地トレーニングができない分、過去の名作から歴史の時間軸に沿って学ぶことを大事にしています。人類が築きあげた130年の映像の歴史の中で育まれてきた表現方法や作品から、いろいろな技法やコンセプトを学び直す良い機会ではないのでしょうか。サスペンスの帝王ヒッチコックの1950-60年代の作品を見直してみると現代の作品よりもいろいろな工夫が多く見られます。いい作品や巨匠たちのビジュアル言語を学ぶことで、自分もクリエイターとしてその言語を自由に使って、さらに奥深いより良い表現ができるようになると私は信じています。(大島 純)

テレビ、演劇、映画など「旧いメディア」は、能天気なままではいられません。今後は必ずや「その企画を今やる意味」を問われ、意味のないものが駆逐されていきます。逆に、ネットコンテンツは気楽で能天気なものがますます増えるでしょう。(岡本 貴也)

世界中のアーティストが、『リアル・デジタルハリウッド化』するようになります。実は、現在CGやVFXという分野=いわゆるハリウッドの大作作品は、実際はバンクーバー、ロンドン、シンガポール、、、など世界中で作っています(理由は税金対策など様々です)。というか、ハリウッドだけで純粋に作っているハリウッド作品は稀でしょう。さらに、このコロナになった為、スタジオ内で働くアーティストが、自宅で作業をし、制作しております。つまり、ハリウッドの大作映画を世界中のアーティストが自宅で作る環境であり、今後のノーマルになりつつあるのです。これは、CG & VFXという分野に限らず、PCを使ったあらゆる作品群に対してノーマルな作り方になるのではないのでしょうか？まさに、「リアル・デジタルハリウッド」かと思います。(小倉 以素)

アニメーション制作で言いますと、私が担当していた劇場版『名探偵コナン 緋色の弾丸』は2021年4月と1年公開延期、TVシリーズ

も再放送対応を余儀なくされました。現状ではアニメ制作の特徴である、作画や編集撮影音響など個々に分かれる作業の集合体であるがゆえに、それぞれ異なる対応をして乗り越えています。実はアニメ業界はコロナの前の「働き方改革」という変革の波に乗って動いていました。コロナ対策でその変革の弱点を見据えた上で、本来の行くべき道を進んでいくことになっただけです。送り手としては、より面白いコンテンツを、より進歩したツール(方法)で送る。この果てないどん欲さがより大切なノーマルになるのではないのでしょうか。(諏訪 道彦)

電子出版の動きに触れつつ「出版物のNew Normal」について考えたい。従来の書店や図書館はコロナ禍によって休業が増え、リアル出版物へのアクセスは大きく損なわれた。一方で同じ時期、電子出版分野では多くの出版社が所有コンテンツを無償で配信したり、これまで電子化を許してこなかった有名作家の作品が立て続けに電子化されたりと、積極的な対応が目立った。ネット経由で入手でき「非接触」である利点が注目されたわけだが、電子出版の機能的な優位性はもつとある。テキストと音声、映像等を関連付けることでユニバーサルアクセスを可能にし、品切れがないのでアーカイブ化も容易。製作・配布コストが小さく個人でも参入しやすい。本来、出版物は「Full Archive, Full Access」であるべきで、私はこれが出版物のNew Normalだと考えている。コロナ禍を機に人々が電子出版の利点にもっと気づけば、その現実化が促進されるだろう。(徳永 修)

コロナは映画業界に大きな試練を与えましたが、映画人に新作の映画を人々に届ける最初的手段はいつも映画館とは限らないことを教えてくれました。コロナによって映画館が閉鎖され、行き場を失った大型劇場公開作品がネット配信によって人々に届けられ、映画館以上の視聴者数を獲得しています。

そうです。人々は映画館で見られないことによる価値の喪失よりも、新作をホームデバイスやスマホで見る事が出来る環境に大きな価値を感じていたのです。しかもコロナが終息したら、人々が映画館の大きなスクリーンに戻ってくることは間違いありません。

これからはどんな大作であっても、1) 映画館を通じて新作を届ける、2) ネット配信を通じて新作を届けるという大きな2つの選択肢が映画業界の「ニューノーマル」になります。

これにより、人々は新作映画鑑賞に新しい利便性を手に入れ、より多くの人が新作を自由に見る時代がくるでしょう!(藤村 哲也)

「アニメ」このワードが世界標準(アジア、ヨーロッパを問わずどの国でも日本のアニメーションを指す事を知っている)となり、巷でクールジャパンの一翼を担う次代の基幹産業などと持ち上げられて久しい。ところが家内制手工業の延長として独自の発展を遂げてきた「アニメ」は個人の才能や努力に支えられており、ディズニーのような巨大なマニファクチュアを形成し辛いのが実際のところであろう。

この十数年、映像コンテンツ制作にデジタル技術は欠かせないものになっており「アニメ」制作もCGを用いた様々な試みが為されてきたが、作画という最も重要なパートは未だにアナログ作業に縛られ、足枷になっている。デジタル作画は20年以上前から存在しているというのである。期せずして感染症の拡大は、作画パートのデジタル化を後押ししているようである。僅かではあるがフルデジタルにワークフローを置き換え、テレワークに切り替えたスタジオもあると聞く。

インフラ整備や作画ツールのトレーニングと言った課題は山ほどあるが、2020年を境に積極的にデジタル化に舵を切り、新たな「アニメ」表現の大海に乗り出して欲しいと願っている。(村田 充範)

## 【教育】

オンライン授業をポジティブで効果的なものにしていきたいと思っています。私の授業では、一対一のアカデミックディベート、普段交流することのない他学年とのディスカッション、国内外留学生と日本人学生の交流、そしてリアルとは一味違う英語を使用したクラス制作等に取り組んでおります。また、外部の学生やゲストを招き、よりビビッドな知識をシェアできることもオンライン授業のメリットであると考えております。そして、海外の学生と交流することも可能であると考えております。学生が留学することなく世界を身近に感じることができるよう、工夫していきたいと思っています。(江幡 真貴子)

最近ではほとんどの学会がオンライン開催だが、私が3月に参加したVR学会はその走りの存在だった。オーラはZoomとTwitchのライブ配信がメインで大きな問題はなかった。一方ポスターは対話性が重視され、Mozilla Hubsベースの3Dバーチャルルームが多数用意され、参加者は自由に部屋を巡り発表者と会話できた。しかしポスターセッションは失敗に終わった。PC性能の要求やHMDがないと不便な操作性からポスタールーム参加者自体少ない状況を招いたが、さらに透明人間になって会場を回覧できる機能が閑散さに拍車をかける結果となった。客がいない店に入るのには勇気があるもので、結果回覧者は皆透明人間になってしまった。この経験から理想のバーチャルポスターセッションの在り方を考えるに当たり、嘘でない人混みかつ他の参加者に有益な機能として浮かんだのは、時間を巻き戻し過去の質疑応答の重量によるサクラの賑わいの生成だ。また機器性能依存削減のため、2D空間のサポートおよび3D空間との状態共有は必須の機能だろう。物理的移動を伴わないオンライン参加のメリットは大きく、来年は実虚混合開催を目指しているそうなので、どのようにリアルとバーチャルの共存が行われるのか、何に失敗するのか、大きな興味を持ってNew Normalの進化に期待する。(大貫 善数)

私自身は2005年から15年に渡り双方向性のあるライブ配信も含めた遠隔教育を行なって来ましたが、2020年はCOVID-19の流行を受け、すべての教育現場で否応なしに遠隔教育に舵を切ることになりました。これまで、この場所や時間にとらわれない教育スタイルは、PCやモバイル端末などの情報端末を覗き込むような形で行なわれて来ましたが、これから先は「朝起きて、壁に掛けられたスクリーンをサッと下ろしてスイッチを入れると、先生やクラスメイトが映し出される」ような、より生活に溶け込んだ形での遠隔教育が当たり前前の時代となって行くでしょう。果たして、そのような仕組みはどんなベンチャーが創りだして行くのだろうか? それを使ってどのような教育が行われるのであろうか? そこで学んだ人たちがどのような表現活動を行なって行くのだろうか? それらすべてに寄り添っていくのが「デジタルハリウッド」であると考えます。(栗谷 幸助)

1対多数という教室で、慣例的に講師がリアルタイムに授業を行ってききましたが、いつも、教室にいる学生の理解度や進度の違いによるジレンマを抱えていました。自身が想像するどんなに良い授業を行ったとしても、前提の整っていない学生には響きません。これまで、複数の学生がそれぞれ進められるような内容を模索してきました。今回のコロナ禍において、オンデマンド教材を作り授業を行ったのですが、進度の違いを少しばかり吸収できているように感じています。できる学生はかんたんなところを飛ばし、まだ知識が浅い学生はじっくりと見ます。学生に託しすぎない仕組みやコミュニケーションのあり方に課題があるとは感じますが、その人にあった必要なものを必要だけ勉強できるアダプティブな環境がこれからのノーマルとなれば、理解度向上や多様な授業の吸収が望め、デジタルハリウッド大学にふさわしい学びができるように感じました。(小松 学史)



2月27日、安倍総理から全国の学校へ臨時休業要請が出され、子供たちは家庭でのオンライン学習を余儀なくされた。ただ、家庭のインターネット環境のばらつきやオンラインでの学びをどう評価すべきかなど、教育関係者や家庭の間で大きな波紋を広げている。私は、2009年より、デジタルテクノロジーによる教育イノベーション、EdTechを推進してきた。当初、教育は人が行う聖域でテクノロジーが入る余地はなかった。しかし、2019年末に政府は、小中学生に一人一台のデバイスと高速ネットワーク、クラウドの構築を3年で5000億円かけたGIGAスクール構想を発表した。準備は整った。私達はVUCAの時代に突入した。教育のニューノーマルとは、これまでの一斉一律のインプット型教育から一人ひとりが自ら問いを立て試行錯誤しながら最適解を求めるアウトプット型教育に変わる。テクノロジーの導入は目的ではない。これからの日常、インフラなのだ。(佐藤 昌宏)

日中間デジタルコンテンツの遠隔サービスの普及。

2020年に入ってからコロナの影響で世の中は大きな変化を興した。自粛する生活の中に、中国の教育界は大きな動きができた。幼稚園から大学まで全国2.82億人の在校生はほとんどオンライン教育を受けるようになった。最初は教師だけでなく、学生も親もなかなか慣れないようで、数か月間の調整で多くの関係者もだんだん慣れるようになった。

この期間中、買い物やエンタテインメントはもちろんオンライン中心で、Tencent Meeting, Zoom, Webexなどを通して、仕事としての国際講義、国際会議、論文指導なども多く体験してきた。19年前に早稲田大学で書いた修士論文『グローバル時代における中国の人材育成について——ITによる日中間人材育成モデルの提案』がますます現実化して、あらゆるコンテンツ分野の遠隔教育や、遠隔サービスも可能になる。特に日中間の双方向遠隔サービスの普及がNew Normalとして期待できるだろう。(夏瑛)

学校は『『いかにばならないところ』ではなく、『楽しみを作り出すところ』これを社会の新たなノーマルとしていきたい。いくら感染症対策が完璧になったとしても、学校が「勉強」を、苦痛を強いる場と説くのであれば、誰も行きたいとは思わない。小学校から大学、大学院、社会人の学びの場まで、学ぶ楽しみ、できるようになる楽しみ、作り出せる楽しみ、そしてそれを人に届ける楽しみを理解している人が、喜んで集まる場所にしていきたい。そんな学校の先生は、少しも偉そうではなく、作り出す楽しみに満ち溢れた、子供のような気持ちで教える人物だろう。そして、そのような場所から生まれる楽しみは、バーチャルな世界での楽しみと、その糧を十分に得られるだけの価値があるものであり、作り手は「物理的に集うこと」の本物の価値も、作り出すことの大変さもよくわかっている…そんな当たり前のことを考えている。(白井 暁彦)

私の担当する自然科学系の基礎科目では“知識の習得と定着”が基本であり、実務で求められる新しい発想は基本事項の再構築を通じた“知識の習得と定着”の積み重ねの延長上にあると考えている。これによって、関連の疎な他分野とのコラボレーションに対しても“気付き”と堅実で豊かな発想を促すことが考えられる。これに対する基礎・専門科目や実習・体験を通じた教育現場ではそれぞれ対応は異なって然るべきであるが、この度の遠隔授業が社会一般に認知されてきている現状を新たな発展への好機と捉え、講義形態の選択肢の一つとして積極的に導入すべきであると考えている。オンライン授業に対応可能な講座を中心に、きめの細かい小回りの利いた本学のクォーター制とリンクさせ、大学に来なくてもよいクォーターを集中・設定し、休学しなくても企業等の学外プロジェクトや留学等に積極的に参加できるような支援体制を構築することが可能であると考えている。(関口 克明)

永きにわたり描くことに携わってきました。

新型コロナウイルスにより対面授業がままならぬ状況となっても、現役の学生の年齢では既にハード、ソフト面は身近にありいつでも活用できるのが当たり前な環境にあつて、ここまで進化バージョンアップされたものを活用した方面では事が停滞することは無く、場所時間を選ばずのデジタル通信を使用した教育の場への変革と常識へのシフトチェンジの時と考えます。

とはいえ、ここ数年、検索力によって膨大なデータからスピードを持って当てはまるであろう物を写す!ということが常習化していると感じていたところ、それがオンライン授業によって、自身で観て感じて考える、創造性の欠如、考えアイデアやアレンジなどの思考力の弱さが顕著に現れることになり、アナログとデジタルの違いやスピーディー差など両者を知る者として良い面の融合に日々葛藤しています。

地球温暖化、自然災害などの問題は絶えません、人はこの度のコロナ禍に限らず山へ海へと足を運び自然を求めます。

デジタル化の進む中でも、それらの場所へ行き写真に収める、スケッチをする、キャンプと、これも同時に考え、伐採ばかりではなく、植樹へとシフトが必要となります。

学校などの教えの場でもデジタルは勿論、創造性も同時に教えていかなければと思います。(高野 正道)

自分の本業はアニメーターであり、アニメーターという職業は多分に職人的な側面があります。職人の世界でよく言われる、師匠の技を盗んで覚えろ、といった類のことは、アニメ界でも常識です。自分の授業もそれを踏襲し、書画カメラで描きながら進める、というスタイルをとっております。ただそれにはケアも必要であり、常に生徒の動向を見守る必要があります。それはシステムを先に決めても、その都度生徒は変わるからです。今回のリモート授業ではそれが思う様にできなかったというのが不満材料ではありません。熱心な生徒は、自分から積極的に質問したりしてそれなりに手ごたえもあるでしょうが、そうでない生徒がどれほどの熱意をもって参加しているかはまったく見えませんでした。面と向かったの授業であれば、声をかけたりして奮起させたりもできるのですが、リモートでは正直、参加しているかどうかもわからない状態です。加えて、例年は30人以下だった生徒数が、今回は45人くらいに膨れ上がり、益々それができない状態でした。今のままのズーム授業では、ただの通信教育と変わらないと思います。もしNew Normalというものがあるとなれば、それはもっと双方向的に目を配れるシステムの構築があつて、はじめて成されるものだと思います。(竹内 一義)

「ピンチをチャンスに」と昨今言われますが、このための必須条件は、躯体が堅固でなくてはなりません。本学が変革を願うのであれば、堅固な躯体を維持するためのバランスの良さが必要であると思います。このバランスの良さは、無限のエネルギーを生み出す原動力となります。

本学の場合は、無機質のIT関連の教育に定評がありますが、それを支えるためには、それと相反する有機質の人間関連の教育が不可欠であります。それは、学生と教員、教員と事務局との円滑なコミュニケーションです。

現在、コロナウィルスでリモートワークであります、これもいつかは限界となるでしょう。この限界時に備えて、今は人間との繋がりを尊重すべきです。

具体的に言うと、今後一層、三位一体(学生・教員・事務局)の連携を強固にすることです。

社会は人間の集まりであり、そこに人間の息遣いを感じる環境を作ることが大切だと思います。本学が今まで培ってきた三位一体(学生・教員・事務局)の連携を更に大事にし、変革の時代を乗り切って行ってもらいたいと切に思います。

日本語分野でも、常にこのことを大事にし、学生を指導していきたいと思っている次第です。(富田 美知子)

新型コロナのパンデミックは、学習スタイルを大きく変化させた。オンライン授業とウェビナーと呼ばれるオンラインセミナーは短期間にすっかり定着し、授業を提供する側のスキルも磨かれてインタラクティブ形式のコンテンツが身近になった。移動の時間と労力が圧縮されると、学びの機会に参加するハードルは低くなる。自分が気になる分野、興味のある話を世界中の講師から聞き、質問することが出来る、まさに時空を超えた学びの場、だ。これまでの学びは、所属している学校や組織のコンテンツが主であったが、その枠を超えて知的探求ができる環境になった。自身も、家族でリビングからタブレットで、海外で開催されているウェビナーに参加し、終了後に家族でディスカッション、そして新しい気づきやひらめいたアイデアをウェビナーサイトに投稿する、という行動が日常になった。これからの時代、学びの機会に恵まれたテックネイティブのZ世代は、どのように Society 5.0 を楽しい世界にしてくれるか、期待したい。(長田 有喜)

大学という立場でのニューノーマルですと、遠隔講義や遠隔の研究指導ということに尽きると思います。以前東京大に勤務していた際の私の経験を参考に記入すると。私は2003年に開催された講演会において、東京・韓国・広島からの3元中継の形式で講演した(私は研究室から講演)。この時、遠隔TVシステムの有効性を痛感した。それでそのシステムを研究室で買い取り研究室内や共同研究者とのゼミに使用開始した。そのころはサーバー用計算機もセットで販売されており100万円以上した。研究室は本郷と柏キャンパスの2か所にあったので、かなり有効利用できた。学科で本格的な遠隔講義専用システムが導入され、2つのキャンパスで私の大学院の講義を聞けるようにした。私立大の非常勤でCGを講義したが、この際も同システムを利用して遠隔講義を行った。さらにサバティカルとして海外の大学に滞在しましたが、毎週のゼミは遠隔で行えた。さらに、遠隔での一方向の講義のみでは不十分と思い、WEB上で動作するCGの実演・体験システムを作成し、教科書にCD版(1998年)を付録とした。現在はJavaScript化し、公開している。講義のみでなく、画面の共有機能の利用でプログラムのチェックなどの研究指導に非常に有効であった。(西田 友是)

ニューノーマルとなり、教育はオンライン、オンデマンドそしてEdTechに大きくシフトしていくでしょう。そのためには、著作権の適切な処理、CGの解説映像など必要だと考えています。今回のDHU JOURNALには私は2編投稿します。1つ目は、コロナのような感染症の患者を人間ではなく人工自我をもったアバターが将来ケアすることを目指して、道徳をモデル化された東京大学医学部の鄭教授とベッパの感情エンジンの発明者の光吉特任准教授との「人工自我のコンセプト」の論文をまとめてみました。2つ目は、エンタメが盛り上がってほしいと願い、ヴァイオリンにより近い音をエレキヴァイオリンで再現するためのエフェクターを制作してみました。また、それを使い、デジハリ大学院の学生の浅田真理さんのVJで演出した演奏を研究成果発表会で披露しました。その実装と開発に協力し演奏してくれた東京藝術大学の学生でヴァイオリニストの大谷舞さんと研究レポートにまとめてみました。医療の現場では感染を抑えつつ、エンタメではよりデジタルを取り入れ、新しいライフスタイルの提案に寄与できたらと考えています。(橋本 昌嗣)

情報科学の発展と情報技術の革新が常に急速に進む現代社会におけるNew Normalとして、私は次の点を想起いたします。物質、生命、情報の全てがこれまでにない速さで世界中を行き来する時代を迎え、人類は様々な観点から食料、水、エネルギー、環境等の有限

性と限界を認識するに至りました。昨今では、科学技術の進展は必ずや人類の幸福に繋がる、という近代以降の人類が持ち合わせてきた信念が揺らいできているように感じられます。今を生き、そして未来を創っていく現代人は、物質的な豊かさを得ることだけに最終的な幸福感や達成感を求めるのではなく、個々人がそれぞれの個性に即した使命感と生きる目的を見出し、その実現を以て生きる幸せと自己の存在意義を感じる事ができる能力を開発し向上させていくこと、これをこれからの現代人の修得すべきNew Normalとしたいと考えます。(馬場 一晴)

新しいことへの挑戦のベースには、アカデミックな基礎を鍛えることが大事。そのために、美術解剖学の授業を担当している私としては、「自然に学べ!」「美の最高の教師は自然だ」というメッセージのもと、人体への興味と知見を深めてもらいたいと考えています。(布施 英利)

コロナの影響で全てリモートになったのは普通の教育モデルに影響すると思う。教室での教育はなくならないけど、オンラインの可能性が理解できた学生はオンライン部分を少しでも使い続けたい可能性が高いと思う。それは難しいにもかかわらず、チャンスです。私のしたいことは教室の教育とオンラインを組み合わせるものです。例えば、授業中オンラインのインプットを使うこと、オンラインとオフラインの授業両方をカリキュラムに含むこと(オンラインスクールではなく、大学のコースのカリキュラムに含むということ)など。教育だけではなく、他の活動もオンラインを含めば成長できると思う。例えば、今研究活動の為に自分の研究をオンライン化する努力をしています。(マイケル ブランセ)

日本にいても、海外の大学に入学し卒業できるようになる。オンライン化の影響は国の制度をも「変えて」いこう。結果、大学の選択肢は世界へと広がる。同様に、どの国にいても、海外の会社で働けるようになる。ビザ発給制限により人材流動をコントロールする政策は無力になる。オンライン化の影響は国の制度を無視し、「超えて」いこう。結果、仕事の選択範囲は世界空間へと広がる。逆に、世界中のどこからでも日本の大学に入学しやすくなる。人材は、頭脳は、流出も流入もする。日本で学ぶ理由、そして、デジタルハリウッドで学ぶ理由を明確にし、世界の中の日本に、そしてデジタルハリウッドになる。(吉村 毅)